

応答表現としての 「本当」に関する一考察

— 「あ、ほんと」「ほんと」「ほんとだ」

荏宿紀子

◆要旨

「本当」は日常会話では欠かせない語であるが、応答や相づちとしての「本当」については先行研究での記述が少ない。応答表現としての「本当」は談話の情報管理に関わり、日本語での会話のしくみを知る上で重要な語である。本稿では、応答表現としての「本当」の使用実態と機能を明らかにした。未知の事実を聞いたことを示す際には「あ、ほんと」や「ほんと」等、相手の考えを聞いて同意する際には「ほんと、ほんと、ほんと」や「ほーんと」等、会話の場で相手とともに気づいたことを示す際には「ほんとだ」が用いられる。「本当」は先行発話が未知の場合に用いられるが、機能により形式に違いがみられることがわかった。

◆キーワード

談話管理、未知、同意、雑談

◆ABSTRACT

The Japanese word *hontou* is common in daily conversation. This paper investigates the use and function of *hontou* as a response expression. A *honto* or *honto* is used to indicate that the speaker has just heard a previously unknown fact. The expression *honto honto honto* or *hooonto* is used to indicate that the speaker is listening to the idea of the other conversation participant and is agreeing. *Honto-da* is used to indicate that the speaker has noticed something along with the other participant at that point in the conversation. Thus, overall, *hontou* is used when the information in the preceding utterance was previously unknown; however, there are differences in the form depending on the function within the conversation.

◆KEY WORDS

Discourse management, unknown fact, agreement, chat

Hontou as a Response Expression
The uses of a *honto*, *honto*, and *honto-da*
NORIKO KARIYADO

1 はじめに

「本当」^[註1]は会話において程度副詞、応答、相づちといった多様な用法をもち、日常会話では欠かせない語である。程度副詞としての「本当」については川端(1999)、片山・舂井(2006)の論考がある。しかし、応答や相づちとしての「本当」については先行研究での記述が少ない。日本語教育において応答や相づちは重要な課題の一つであり^[註2]、応答表現としての「本当」について明らかにすることは、日本語学習者にとっても有益である。

本稿では、日本語教育への応用を見据えて、応答表現としての「本当」の使用実態と機能を明らかにしたい。

2 先行研究と本稿の立場

森山(1989)は談話管理の観点から応答の機能を考察している。森山(1989: 79-83)では「応答者にももとの情報がない場合」の肯定的応答の驚き表示類の一つとして「本当」、否定的応答の問い返し類の一つとして「本当↑」、また「応答者にその情報が既にある場合」の賛成認定類の一つとして「本当本当」が挙げられている。

大浜(2002: 5)では、意味内容のある相づちとして「本当系」を挙げており、具体的な表現として「なるほど、なるほどね、確かに、確かにね、本当、ほんとほんと、本当に、本当だよ、本当ですよ、本当ですよ、ほんまに、ほんまよ、ほんまじゃ、まじで」を挙げている。

堀口(1997: 219)では、上級学習者が用いた相づちの用例として「あーほんと」「あほんと」「ほんとー」「ふーんほんと」「あらほんと」を挙げ、「ほんと」をいろいろに使いこなして、「今聞いたことは未知のことだが、わかった」ということを表している」と述べている。

本稿では森山(1989)、堀口(1997)を参照し、先行発話のあとに発話順番をとって発せられるものを「応答」、相手の発話権の中で発せられるものを「相づち」とする。典型的には、相手の発話が途切れたところで発するのが応答、

相手の発話が続いている際に小声で発せられるのが相づちとなるが、実際には相手の発話が続くか否かの予想が外れることもあり、応答と相づちは連続的で、どちらなのか判断が難しい場合もある。

しかし、「応答」は発話権をとっているため、談話の情報管理の上で、「相づち」より明確な働きをしていると考えられる。先行研究では、応答や相づちの全体像の中の一部の例としての記述となっている「本当」について、本稿では応答表現の用例に絞り、情報管理の観点からその詳細を明らかにしたい。

3 調査方法

本稿では、『名大会話コーパス』^[註3]を用いて調査を行った。話題を一切制限していない雑談資料でデータ量が豊富であり、応答表現としての「本当」の用例が十分に採集できると考えたためである。

用例採集にあたっては国立国語研究所のコーパス検索アプリケーション『中納言』を用いた。語彙素が「本当」であるものを検索した上で、『名大会話コーパス』の書き起こし資料に戻って用例を確認するという方法をとった。

検索した用例の中で話者の出身地が東京、神奈川、千葉、埼玉となっているものを調査対象とした^[註4]。検索した「本当」の中で、程度副詞の「本当」、相づちの「本当」、疑問文の答えとしての「本当」は対象外とした^[註5]。また、上昇調の「本当」は応答表現としての使用もありうるが、質問表現となっている可能性もあるため、今回は対象外とした^[註6]。「本当」単独での使用のみでなく、他の感動詞類と共起した表現形式も分析対象とした。

4 用例と考察

4.1 未知の事実を聞いたことを示す際の「本当」

応答者が知らなかった事実を話し相手から与えられたことを示す場合には「ア、ホント」類や「ホント」類が使われる。聞いた事実についてどう判断するかは場合による。次は未知の事実を聞き納得しない場合の例である。

- (1) F045: うん。濃い顔。沖繩系とか大好き。
 F160: ほんと一。私わかんないな一。-略- (data67)
- (2) F018: あれもつぶれたんじゃない?
 F004: え、つぶれてないよ。だってこないだ友だち行ったもん。
 F018: ほんと。もうつぶれそうだと思うけど。 (data13)

(1) (2) とともに「本当」のあとに、先行発話の内容を意外に感じる事が書かれている。(1)は濃い顔が大好きというF045に対し、F160は「私わかんないな一。」と言っている。(2)もF004がつぶれてないと言っているのに対し、F018は「もうつぶれそうだ」と述べている。

次は先行発話を受け入れる場合の例である。

- (3) F074: あ、神奈川のどこですか。 F087: 神奈川、横浜なんですけど。
 F074: あ、ほんとに。 F087: はい。 (data54)
- (4) F120: 授業中は全部英語? F049: 全部英語。
 F120: あ、本当、じゃ、おもしろいよね一。 (data53)

(3)は初対面同士の会話である。相手の居住地に納得しないとは考えにくい。未知の事実を聞いていることを「あ、ほんとに。」で示している。(4)はF120の質問の発話から、F120が授業が「全部英語」であると予測していることがわかる。後に「じゃ、おもしろいよね一。」と言っていることから未知の事実を予想通りであると受け入れている。

文脈により先行発話について納得しない場合もあれば、受け入れる場合もある。「本当」そのものは内容に対しては中立で、「未知の事実を聞いたことを示す」際に用いられている。

4.2 相手の考えを聞いて同意する際の「本当」

相手の考えを聞いて同意する際には「ほんと、ほんと、ほんと」や「ほーんと」等が用いられていた。次のような例である。

- (5) F098: そうですね。初めてですからね、女性会長。もっと早くいてもいいと(そう)思うんですけど。
 M017: ほんと、ほんと、ほんと。おんな、おんなじ方がずっと長かったから(ああ)やっぱりね。<笑い> (data24)
- (6) F080: わかる。今、ほらさ、人間の子育てって大変じゃないのー。(うーん)犬や猫の方がいいと思っちゃうわねえ。(ねえ)うーん。
 F002: まあ、今、子どもがいなくてよかったと思うわ。
 F080: ほーんと。もう、子育て済んでよかった。-略- (data31)

(5) (6)は共に先行発話に相手の考えが述べられている。相手の考えそのものは未知の事柄だが、応答者が同じ考えをもともと持っている場合に、「ほんと、ほんと、ほんと」や「ほーんと」で同意を示している。このタイプは「ア、ホント」類や「ホントダ」類では示せない。「ほんと」の反復形や「ほーんと」などの変化形は同意の気持ちが強いことの表れであると考えられる。

4.3 会話の場で相手とともに気づいたことを示す際の「本当」

会話の場で相手とともに気づき、その事柄が事実であると判断したことを示す際には「ホントダ」類が用いられていた。次のような例である。

- (7) F095: <笑い>。でもここにあるじゃんね、RECが。
 F058: <笑い>。ほんとだ。ね、入ってんのかな、ほんとに。(data69)
- (8) F119: うんうん。そうなのよ。で、突然あーとか言うから、なにーとか言ったら、ちょっと仕事のことでちょっと思い出したとか言って。なーにーとか思って。なかなかねえ。
 F160: 社会人は大変だね。
 F119: ほんとだね。遅くまで遊んでるとまた明日仕事だしとかさ。(data68)

(7)は録音機のことを話しておりF095の発話もその場で気づいたことを示す内容である。F058はF095と目の前で確認し事実であると判断したことを「ほ

んとだ」で示している。「ほんとだ」のあとに「ね」とあることから、F058が単にF095の発話を聞いているだけでなく、一緒に確認していることがわかる。(8)は話しながらF160が気づいたことについてF119も同様に気づいたことを示している。4.3は4.1の例とは異なり、会話の場で会話を通して気づいた事柄が事実であると判断したことを示している。「ア、ホント」類では応答者が事実であると判断していることにならない。「ほんと、ほんと、ほんと」ではその場で気づいたことにはならない。その場で気づいて事実であると判断したことは「ホントダ」類により示されるといえる。

4.4 各用法の表現形式と用例数

3つの用法には表1のような形式が用いられていた。〔 〕は用例数である。「ホント」類は①②ともに用いられる。音調によってもバリエーションの多い類であると考えられる。「ア、ホント」類は①のみ、「ホントダ」類は③のみに用いられる。「ア、ホント」類が①のみに分類されるのは「ア」の働きによるところが大きいだろう。「ア」によって未知の事柄を知った軽い驚きが表示されている。「ホントダ」類が③のみに分類されるのは、「ダ」の働きによる。「ダ」は断定や判断を示す際に用いられる。「ホントダ」は「ダ」によって、その場で気づいた事柄が本当であると判断したことを示している。

表1 本調査の「本当」の表現形式と用例数

①未知の事実を聞いたことを示す際の「本当」[45]	ホント類	ほんと(本当)[9] ほんとに[1]
	ア、ホント類	あ、ほんと(本当)[19] あ、ほんとに[3] ああ、ほんと(本当)[5] あー本当、ふーん[1] あっ、ほんと(本当)[3] あら、ほんと[1]
	エエ、ホント類	ええ、ほんと(本当)[2] へえー、あ、ほんと[1]
②相手の考えを聞いて同意する際の「本当」[7]	ホント類	いやー、ほんとにねー[1] 本当よねー[1] ほんとよー[1] うん、うん、本当[1]
	ホント変化形	ほーんと[1] うーん、ほんっと[1]
	ホント反復形	ほんと、ほんと、ほんと[1]
③会話の場で相手とともに気づいたことを示す際の「本当」[22]	ホントダ類	あっ、ほんとだ[1] ほんとだ[3] ほんと(本当)だよ(ー)[9] ほんとだね(ー)[5] ほんとだよね(ー)[4]

5 おわりに

本稿では応答表現としての「本当」の3つの機能と表現形式の使用実態を明らかにした。「本当」は先行発話が未知の場合に用いられるが、相手によって知らされた事実か、応答者がもともと考えていたことと同じか、相手とともにその場で気づいたことかによって用いられる形式が異なっていた。①は未知の事実を相手によって知らされ、③は未知の事実に関わりながら気づき判断しており、情報を得る過程が異なる。②は相手と応答者の考えが一致した場合である。

韻律情報を含めて分析すると「本当」はさらに多様であると考えられる。今後は録音資料も用いて分析を行いたい。「本当」に近い用法をもつ「確かに」「なるほど」との比較も必要である。また、日本語学習者の応答表現との比較、日本語教育への応用についても取り組みたい。

〈和光大学〉

付記

本稿の脱稿後に森山(2015)の存在を知った。論証方法などが本稿とは異なるが重要な先行研究であり、同論文との違いは今後の研究で考察したい。

注

- [注1] …… 実際は様々な形式があるが本稿で本当系を指すときは「本当」で代表させる。
 [注2] …… 郭(2003)、土屋(2012)、宮永(2013)等、多くの論考がある。
 [注3] …… 用例中の下線は本稿の筆者によるものである。紙幅の都合で一部改行をせずに続けたり、発話の内容を「-略-」と表記して省略したところがある。
 [注4] …… 方言によっては「ほんまに、ほんまよね、ほんまじゃ」の使用も考えられるため、今回の調査では首都圏に絞ることとした。
 [注5] …… 程度副詞の例：「F046：本当、嫌だー。」(data72)
 相づちの例：「F114：赤坂見附か、(あ、ほんと) 永田町か、(うーん) うん、何でも行ける感じ。」(data65)
 疑問文の答えの例：「F147：うそ、何それ。F114：ほんと。-略-」(data65)
 『名大会話コーパス』では相づちは()で示されている(藤村他2011)。

書き起こしの基準により応答か相づちかの判断が異なる可能性があるが、本調査では資料の記述にしたがって応答表現の例を集めた。

[注6] …… 上昇調の例：「F058：大丈夫。京王線に乗れば着くから。F095：本当？（うん）じゃ、行くよー」（data69）

実際の音声は多様であることが予想されるが、本調査では資料の記述にしたがって判断した。

参考文献

- 大浜るい子（2002）「相づち使用と対人関係」『広島大学日本語教育研究』12, pp.1-9. 広島大学大学院教育学研究科日本語教育学講座
- 郭末任（2003）「自然談話に見られる相づち的表現—機能的な観点から出現位置を再考した場合」『日本語教育』118, pp.47-56.
- 片山きよみ・舛井雅子（2006）「初・中級レベルの日本語教育で教える程度副詞—とても・大変・非常に・すごく・ひどく・本当に」『熊本大学留学生センター紀要』9, pp.25-53. 熊本大学留学生センター
- 川端元子（1999）「広義程度副詞の程度修飾機能—「本当に」「実に」を例に」『日本語教育』101, pp.51-60.
- 土屋菜穂子（2012）「OPI（Oral Proficiency Interview）に見られる聞き手の応答表現「なるほど」について」『青山語文』42, pp.54-68. 青山学院大学日本文学会
- 藤村逸子・大曾美恵子・大島デイヴィッド義和（2011）「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」藤村逸子・滝沢直宏（編）『言語研究の技法—データの収集と分析』pp.43-72. ひつじ書房
- 堀口純子（1997）『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 森山卓郎（1989）「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1, pp.63-88. 大阪大学文学部日本学科
- 森山卓郎（2015）「感動詞と応答 新情報との遭遇を中心に」友定賢治（編）『感動詞の言語学』pp.53-81. ひつじ書房
- 宮永愛子（2013）「日本語学習者の相づち表現の分析—接触場面の雑談データをもとに」『金沢大学留学生センター紀要』16, pp.31-43. 金沢大学留学生センター